第 99 回 二科巡回展（京都展）秋深まる古都で開催

二科京都展は、京都市美術館で、二科京滋支部と京都新聞の共催により、11 月 27 日（木）から 12 月 7 日（日）まで開催された。風格のある美術館であって展示環境は申し分ないのだが、例年、二科と独立美術が同時開催のため絵画、彫刻、デザイン、写真それぞれの展示スペースが狭く、今年も 4 部門で計 302 点の展示となった。入場者は 5,804 名で昨年より 300 名減と少し残念な結果となった。来年は 100 周年であり、より魅力ある展示に努めるとともに、京都新聞の協力も得て入場者増につなげなければと考えている。

絵画の展示数は、137 点と昨年とほぼ変わらないが、11 人の 2 点入選昨を 2 段掛けに飾ったこと、総理大臣賞、都知事賞、3 賞など主だった受賞作がそれぞれ異なった表現であったことなどもあって、展示に減り張りがつくれた。11 月 29 日（土）に濱田進、12 月 6 日（土）に中原史雄がそれぞれギャラリー・トークを行い、作品解説とともに公募展に出品するには、何をどのように描けばよいかについても語った。来年に向けて 1 人ひとりの表現の深化に努めたい。

京都・滋賀地域の展覧であるが、出品者は、会員 2 名、会友 2 名、入選者 1 名というのが現状である。（滋賀からの出品者はいない）作品の傾向は、抽象的な作品が 3 点、具象なものが 3 点であり、若い世代は具象的なものの表現に向かっているようである。このことは、本展の入選者をみても同じ傾向にある。団体展への出品が年々減っているのは二科だけでなく、他の団体展でも同じである。原因を色々と挙げることはできるが、時代の変換期に来ているのだろう。

デザイン部は全国巡回作品 64 点と京・滋関係 3 点の 67 点の展示。自由テーマ・ポスターや特別課題「ユニセフの活動」をテーマにしたポスターを中心に、A 部門特選の山内道代（京都）、B 部門特選の岐部稚子（滋賀）の受賞作品を含め、展示数は少ないが内容の濃い展示になった。

写真部も、青天に恵まれた初日から多くの来場者で賑わった。写真が撮りやすくなったこともあり、親しみを持って鑑賞する人も増えたように感じる。11 月 29 日（土）に西岡伸太特別会員のギャラリー・トークを開き、対象をどう捉えたらよいかなど、写真の世界について熱っぽく語ってもらった。トークの最後に、いま話したことを参考にして、ぜひ二科展に応募してくださいとのアピールもあった。

（文責：二科会京都支部　中原史雄）